

国境なき韓国と日本へ

元米山奨学生 洪 延周 (ホン ヨンジュ)

韓国、釜山出身の洪延周 (ホンヨンジュ) です。

2750 地区の奨学生で、今年、米山ロータリーの E クラブのメンバーになりました。

今回、日韓親善会議という場で、皆さまの前でお話をするという機会を与えていただき、とても光栄に思います。

大変恐縮ではありますが、韓国と日本が政治や歴史の問題を乗り越え、今より更に、互いに一人の人として目を向け合い、受け入れ合うようになればという願いをもって、この場に立たせていただきました。

どうぞよろしくお願ひいたします。

私は 2005 年度にロータリーの奨学生になって以来、ロータリーの方々と身近で接する機会が増え、外から見ていたロータリーの活動を中から見られるようになりました。そして、それを通して様々なことを考える貴重な経験を得させていただきました。

人と交じわって生きていく中で、相手の人は自分自身の鏡になることがあります。自分の今の感情が簡単に相手に伝わり、相手もまた、同じような態度で接してくることが度々あるのです。

私は、韓国は日本の鏡であり、日本は韓国の鏡でもあるかもしれないと考えたことがあります。他国の人々の発言や行動は自国の人々の発言や行動を表すものであるかもしれません。

韓国と日本には、今後同じビジョンを持って、肩を並べ、前を向いて歩いていってほしいという希望を持っています。そこで、韓国と日本がどのような関係を築いていたら良いのかについて、私自身の考えを、これから少しお話をさせていただこうと思います。

はじめに、ロータリーで行う奉仕から見た、人と人との繋がりについて考えたことをお話しします。

ロータリーでは、今日に至るまで、奉仕を通じた世界平和を訴えてきています。奉仕とは一体、何でしょうか。

奉仕には慣れてないこともあってでしょうか、私自身、奉仕を行うことが何だか照れくさいというような気持ちを抱くこともありました。しかし、ロータリーの奉仕活動を目にすることで、奉仕とは目に見える物質的なものだけではなく、いつどこにいても誰にでもできるものであることに、改めて気付かされました。

奉仕とは、金銭的に豊かな人が目に見える物質的なものを与えることだけではないのです。例えば、笑顔で人に接することや、お店などですれ違う人にドアを開けて支えてあげること、それも奉仕であるということです。

皆さまもご存知のように、笑えるような気持ちでないときも、笑うことによって心もついてくると言われます。奉仕もまた、奉仕をすることによって心がついてくるものだと思います。最初は「私なんか奉仕を行うなんて」というぎこちなさを覚えるかもしれませんが、奉仕を通して自分以外の人と交流することによって、相手の笑顔を見たり、感謝されたりする中で相手から感じる良い感情を、光の反射と同じように、自分自身も体中で感じるができます。とても強い伝染力を持っているものの一つです。

私達は他人との関わりの中で生きています。アメリカの女優であるアンジェリーナ・ジョリーは「私達は完璧な人間を見つけることによって愛するようになるのではなく、不完全な人間を完全に見ることによって、愛するようになれる」と言っています。私は、この「不完全な人間を完全に見る」ということの意味を考えてみました。すぐには理解できない言葉でしたが、私流に解釈したいという気持ちから、勝手にいろいろと考えてみました。そこで、よく耳にする「誰も人は一人では生きていけない」ということばを思い出しました。完全な人が「不完全な人を完全に見る」ことは難しいことであるかもしれません。不完全な人であるから、謙遜を覚え、相手を尊重し、良い部分をみようとするのだと思います。それが相手を「完全に見る」ことにつながるのではないのでしょうか。私達は一人では不完全な生き物であっても、不完全な人がお互い支え合えば、完全となれるのです。

奉仕もそうです。奉仕とは、立場が上だとか下だとかではなく、不完全な人同士が支え合い、共に生きていくことそのものではないのでしょうか。そして、その中で、自分を他人の立場から見つめることによって、自分の本質が見えてくる、自分を成長させるきっかけにもなるものだと思います。

奉仕のベースは愛で、愛はギブ&テイクがいいと個人的に思っていますが、他人と共存してこそ、それは実感できる部分でもあります。愛は、愛を受けた人でないと伝えることが難しいものかもしれません。

一人で生きていると愛を感じにくいものですが、人と人が交じわる世界にはどんな形であれ、人の温もりが存在します。愛の交わりを感じられます。不完全な人を完全にみるにはその愛が必要なのです。

次は**出会いから始まる国際親善**について話させていただきます。

ロータリーは奉仕を通しての世界平和を目指していますが、世界平和とは一人一人の交流から生まれてくるものであると思います。一人一人の交流がすべての始まりであるということです。とても地味なことで、すぐに結果が見えないようなものでもあります。

その一人一人の交流は、ロータリーですでに始まり、今、素晴らしきこの場所でも始まっているのです。ロータリーという組織は韓国と日本を結び付けてくれた架け橋的な存在です。

私は以前、ノーベル賞を受賞した野依良治（のよりりょうじ）博士の講演会を拝聴したことがあります。そこで野依博士が最初に話された「出会い」という言葉がとても印象に残っています。

野依博士は、今ここに自分がいるのは何よりも人との繋がりの中で、人との出会いがあったからこそだということをおっしゃっていました。この「出会い」を、ロータリーはまさに韓国と日本に提供してくれたのだと思います。偶然的な出会いではなく、必然的な出会いの場です。

私達は目先のことを考え、すぐに変化が見えないとがっかりし、希望を持たなくなる事があります。しかし、今すぐには目に見える形で確認できなくても、一人一人の力はとても強いパワーを持っていて、いつかきっと変化を起こすことができるのです。一つの雨粒がいずれ大きな川を作り上げるのと同じように、きっと一人一人の思いは大きな力となり、やがて川となり、海へと羽ばたくことができると強く信じています。今、韓国と日本は、そのような小さな変化が大きな変化となっていく途中にいるのかもしれませんが。

今の日本と韓国は、地理的に近いだけではなく、昔では考えられないくらい心も近い国になりました。一人一人の出会いを通して、友情が身近な人に伝播し、韓国人と日本人の友情の広がっていることを身近で感じることも多く、一人一人の強い思いが良いパワーとなっています。

韓国と日本のドラマや音楽による国際交流も、韓国と日本の心の距離をさらに近くしてくれました。日本には、韓国のドラマや音楽が好きな人が大勢います。同時に、韓国においても日本のドラマや音楽に興味を抱く若者が大勢います。

ドラマや音楽は、その国の情緒などの有形・無形の文化を背景にしている、頭で相手の国を理解するのではなく、心で相手の国を理解し、互いを歩み寄らせる力を持っている、素晴らしい芸術の一つであるのです。

韓国と日本は歴史的に文化の交わりが多い国同士です。自国の文化は、他国の文化が存在してこそ見えてくるものですが、もはや韓国と日本の文化は個別に考えられないほど強く結び付いていると言えます。人が一人では生きていけないのと同じように、韓国と日本は共に歩んでこそ、真実の価値が見えてくる、皆様もそう思いませんか。

次はロータリーが導いてくれた一人一人の交流について話させていただきます。

今を生きていく上でより良い人間関係を築いていくことはとても重要であります。

あるブログで、「世界で一番難しいことは人と共に生きることで、同時に、人と共に働くことも一番難しい」と書いてあるのを目にしたことがあります。そして、成功に必要な要素のうち技術や知識は 15%に過ぎず、85%は良い人間関係に支えられると言われることもあります。

私達は人と接する上で、いろいろな壁にぶつかります。自分と自分との壁、自分と友達との壁、自分と家族との壁など、私達はこれらの壁を少しでも低くする努力が必要です。ロータリーが目指していることの一つに、この壁を無くすこともあると思います。

こうした壁や誤解というものは、先入観から生まれると思います。完全にできあがったパズルを見るのではなく、いくつかの断片からあいまいに想像し、そこから先入観を作ってし

まうことによって、全体像を把握してから下す判断とは大きくずれた判断を下す恐れがあるのではないかと思うのです。

人と付き合っていくなかで、先入観ほどコミュニケーションの邪魔になるものはないと思います。その先入観を生み出しがちなものは、私達の歴史の問題です。

私が日本でよく、「過去のことがあるから、韓国人は日本が嫌いでしょう？」と聞かれることがあります。確かに、韓国人の中にはそういう人もいるとは思いますが、しかし、日本や日本人に対して友好的な態度を持つ人もまた多いことに目を向けるべきです。これは、韓国と日本がいつかはあるべき姿になるための希望を持つために大切なことです。希望を持つことで、一人一人の思いが強くなり、その思いは思いに留まらず、現実となるのです。

私達は問題に直面すると、その問題にばかり目を向けがちで、そこからなかなか抜け出すことができないことがあります。そういう時こそ、神を見、生きていることへの喜びに目を向けるのです。そうする過程で、いつの間にか問題が解決されているということがしばしば起こります。When we are out there in the dark, We'll dream about the sun. 世界が闇に包まれた時は皆で太陽を見るのです。ダイアナ ロスの歌の詩です。

私は日本に留学する前、日本から学べることは学ぶべきであると両親から常に聞かされてきました。両親から日本についての否定的な話は聞いたことがありません。

度々韓国に帰省した際も、日本や日本人について良いイメージを抱き、日本のことを聞いてくる韓国人が周りに数多くいました。そして、日本では、私が名古屋にいた頃、授業の一環で韓国を紹介してほしいと言われ、日本の高校を訪問させていただいたことがあります。そこで歴史を教えていらっしゃる、ある先生に出会いました。その先生は真実の歴史を日本の生徒に教えるべきだという強い信念を持っている方でした。それが縁となり、時には私を招いてくださり、韓国人である私を通して韓国を紹介する授業を設けてくださったこともあります。

私達は政治やネットやマスコミに左右されることがあまりにも多いです。韓国人の人も日本の人も自分をしっかり持って、各自が経験したことを大事にし、自分の目で周りをしっかり見つめることができるようにしなければなりません。

韓国と日本が特別な事情を抱えているのは事実です。しかし、大勢の韓国人と日本人は一人一人の絆を強くしています。どうも友達の関係になると、韓国と日本の間の特別な事情はそれほど気にならなくなるようです。一人と一人が出会った時は、政治や歴史を背景にして判断するよりは、一人の人として見るようになるからかもしれません。同じように、少なくともロータリーの中では政治の世界のようなものを考えなくても良い、純粋に奉仕を通して、人と人との交流を深めることができる、そういう場であってほしいと思います。

私は、ある時まで虹の色は7つだとばかり思っていました。しかし、虹の色の種類や数は国によって違うということを知りました。日本でも韓国と同様、虹の色は7色だと聞いております。私は、虹の色が7つと決まっていることに対し、疑問すら感じませんでした。実際に、虹が掛かっているのを見ても、七色でできているという先入観に囚われ、七色の間を繋

いでいる色が存在していることには気付きませんでした。

しかし今は、七色の間を繋いでいる色のように、世界各国は切っても切れない何かの絆で繋がっているような気がします。そして、その絆は一人一人の交流から始まるものであると、私は思います。

一人一人の交流というものは目立たないもので、国家レベルから考えますとなおさら影響力がないのではないかと思われがちです。しかし、一人一人が交流を深めていくなかで、その輪が広がれば広がるほど、七色の間を繋いでいる色は強く結ばれるようになっていくのではないのでしょうか？

国際交流もまた一人一人が築いていくものです。その国際交流に積極的に参加し、影響力を持っていくためには、ロータリーアンの一人一人の存在が欠かせません。ロータリーアンの一人一人の友情の交流が、韓国、日本だけではなく、他国に良い影響を与える存在になることを強く信じております。

最後に私が書いた詩を読ませていただきたいと思います。私達は神様から自分も含め、人を愛するためのとても貴重な身体をいただきました。口と手と足は愛を表現するため、人を愛するために与えてくださったのです。私達に与えられた命は自分の意思で今ここに存在しているのではなく、一人一人生かされている命だと思うのです。自分の体は自分のものではない、だからこそ、自分のエゴによる考えや行動には多くの注意を払う必要があるのかもしれない。

口は愛を伝えるためのもの。

口は言葉なくしても人を幸せにできるもの。

手は人へ温もりを伝えるためのもの。

手は人の温もりが必要な人に手を差し伸べるためのもの。

手は手と手をつないで、一緒に歩いていくためのもの。

足は歩み寄るためのもの。

足は困っている人の所に行けるようにしてくれるもの。

以上になります。ここで、ロータリーの今後のますますの発展をお祈りしながら、私のスピーチを終わらせていただきます。拙い言葉を最後まで聞いてくださり、ありがとうございました。皆様 サランヘヨ♥